

(1) 虐待の人間関係の再現傾向

表 3-1 性別度数分布

	男	女
1 群 (N=11)	2	9
2 群 (N=6)	6	0
3 群 (N=2)	1	1
4 群 (N=4)	2	2
計	11	12

表 3-2 虐待別度数分布(重複有り)

		身体 N (%)	性 N (%)	心理 N (%)	ネグレクト N (%)	DV の目撃 N (%)
1 群 (N=11)	男 (N=2)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (100%)	0 (0%)
	女 (N=9)	2 (22.2%)	3 (33.3%)	3 (33.3%)	7 (77.8%)	1 (11.1%)
2 群 (N=6)	男 (N=6)	5 (83.3%)	0 (0%)	4 (66.7%)	3 (50%)	2 (33.3%)
	女 (N=0)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
3 群 (N=2)	男 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (100%)	0 (0%)
	女 (N=1)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (100%)
4 群 (N=4)	男 (N=2)	2 (100%)	0 (0%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=2)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (50%)	2 (100%)

表 3-3 2 群と 4 群における TSCG 下位尺度得点の変化

		不安	抑うつ	怒り	PTS	解離	顕在的解離	空想的解離
2 群	変化なし	0	1	3	1	0	1	3
	上昇	1	0	1	1	1	1	0
	低下	4	4	1	3	4	3	2
4 群	変化なし	0	0	1	1	3	1	0
	上昇	1	0	1	0	0	0	2
	低下	2	3	1	2	0	2	1

表 3-4 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1 群	4.60	3.60	4.00	3.38	3.17	1.71	2.83	1.13	1.67
2 群	3.00	3.50	3.00	4.50	5.00		3.50	2.50	6.00
3 群	1.00		9.00	0.00	0.00	1.00	1.00	0.00	7.00
4 群	4.33	1.50	4.00	3.00	4.00	4.75	3.75	4.00	5.00

(2)力による対人関係

表 3-5 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1 群	3.67	3.67	2.67	3.75	1.67	0.00	2.33	0.25	2.67
2 群	3.67	3.50	4.00	3.60	4.80	3.00	3.40	2.60	2.00
3 群	4.00		7.50	1.50	0.00	0.50	1.00	0.00	7.00
4 群	4.33	1.50	4.00	3.00	4.00	4.75	3.75	4.00	5.00

(3)自信の欠如

表 3-6 虐待別度数分布(重複有り)

		身体	性	心理	ネグレクト	DV の目撃
		N(%)	N(%)	N(%)	N(%)	N(%)
1 群 (N=7)	男 (N=4)	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	2 (50%)	2 (50%)
	女 (N=3)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	2 (66.7%)	2 (66.7%)
2 群 (N=5)	男 (N=2)	1 (50%)	0 (0%)	1 (50%)	2 (100%)	1 (50%)
	女 (N=3)	1 (33.3%)	0 (0%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)
3 群 (N=5)	男 (N=3)	1 (33.3%)	0 (0%)	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0%)
	女 (N=2)	0 (0%)	1 (50%)	0 (0%)	2 (100%)	0 (0%)
4 群 (N=7)	男 (N=3)	3 (100%)	0 (0%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	0 (0%)
	女 (N=4)	1 (25%)	1 (25%)	1 (25%)	4 (100%)	1 (25%)

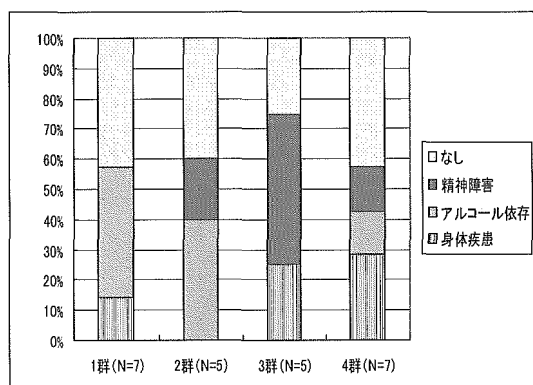


図 3-19 実母の疾病

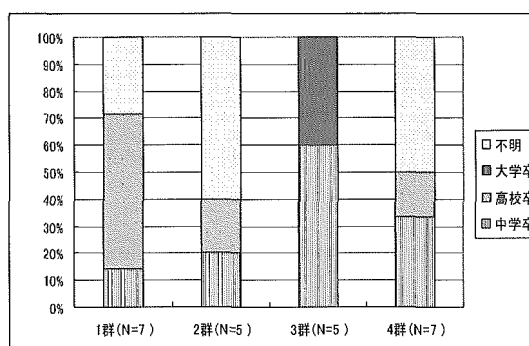


図 3-20 実母の学歴

表 3-7 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1 群	5.00	3.00	4.50	2.00	4.00	2.50	3.33	3.00	3.00
2 群	4.00	2.00	1.67	3.00	1.00	3.00	3.33	1.67	3.67
3 群	3.67	1.00	2.67	2.00	5.33	3.00	3.67	1.75	1.00
4 群	4.00	5.33	6.17	4.17	3.00	2.40	3.20	1.40	5.40

(4)注意多動の問題

表 3-8 性別度数分布

	男	女
1 群 (N=11)	3	8
2 群 (N=4)	4	0
3 群 (N=2)	0	2
4 群 (N=7)	5	2
計	14	10

表 3-9 虐待別度数分布(重複有り)

		身体 N(%)	性 N(%)	心理 N(%)	ネグレクト N(%)	DVの目撃 N(%)
1 群(N=11)	男(N=3)	1(33.3%)	0(0%)	1(33.3%)	3(100%)	1(33.3%)
	女(N=8)	2(25%)	2(25%)	3(37.5%)	6(75%)	1(12.5%)
2 群(N=4)	男(N=4)	3(75%)	0(0%)	4(100%)	3(75%)	2(50%)
	女(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
3 群(N=2)	男(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=2)	1(50%)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	2(100%)
4 群(N=7)	男(N=5)	5(100%)	0(0%)	2(40%)	1(20%)	0(0%)
	女(N=2)	0(0%)	1(50%)	0(0%)	2(100%)	1(50%)

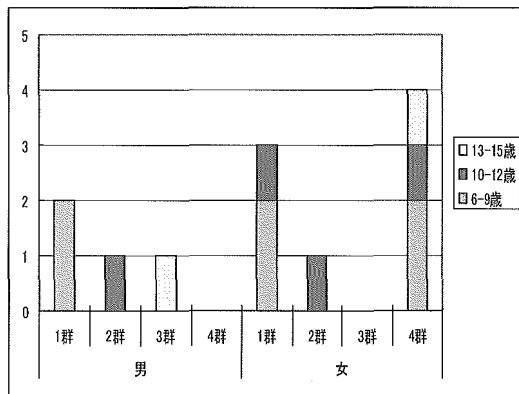


図 3-21 年齢別度数分布

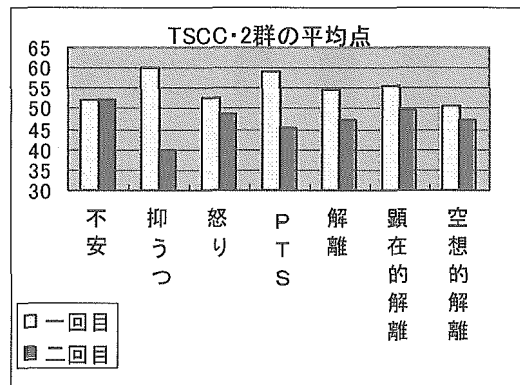


図 3-22 2 群の TSCC 下位尺度得点

(5)学校不適応

表 3-10 虐待別度数分布(重複有り)

		身体	性	心理	ネグレクト	DVの目撃
		N(%)	N(%)	N(%)	N(%)	N(%)
1群(N=5)	男(N=2)	1(50%)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	0(0%)
	女(N=3)	1(33.3%)	0(0%)	0(0%)	2(66.7%)	2(66.7%)
2群(N=2)	男(N=1)	1(50%)	0(0%)	1(50%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=1)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)	0(0%)
3群(N=1)	男(N=1)	1(100%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
4群(N=4)	男(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=4)	0(0%)	1(25%)	0(0%)	4(100%)	1(25%)

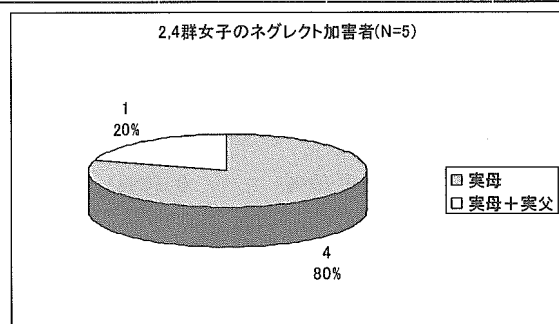


図 3-23 2群、4群女子のネグレクト虐待者

表 3-11 実母の疾患別度数分布

	身体疾患	アルコール依存	精神障害	なし
1群(N=5)	0	3	0	2
2群(N=2)	1	0	0	1
3群(N=1)	0	0	0	1
4群(N=4)	2	1	1	0

表 3-12 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1群	4.00	2.00	1.67	3.00	1.00	3.00	3.33	1.67	3.67
2群		6.00	6.00	6.00	4.00	3.00	3.00	3.00	3.00
3群	3.00		3.00	4.00	5.00	5.00	6.00		8.00
4群	7.00	4.50	6.50	4.25	4.33	2.75	3.67	1.75	2.67

## (6) 感情抑圧

表 3-13 年齢別度数分布

	6-9 歳	10-12 歳	13-15 歳
1 群 (N=7)	3 (42.9%)	4 (57.1%)	0 (0%)
2 群 (N=6)	3 (50%)	3 (50%)	0 (0%)
3 群 (N=5)	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)
4 群 (N=6)	0 (0%)	3 (50%)	3 (50%)

表 3-14 4 群における TSCC の平均得点

	不安	抑うつ	怒り	PTS	解離	顕在的解離	空想的解離
一回目	49.5	59.3	50.3	51.5	52.0	55.5	50.8
二回目	55.0	54.0	44.0	51.3	52.0	53.5	49.0

表 3-15 4 群の TSCC 臨床群の度数

	不安	抑うつ	怒り	PTS	解離	顕在的解離	空想的解離
一回目	0 (0%)	3 (75%)	1 (25%)	0 (0%)	1 (25%)	2 (50%)	1 (25%)
二回目	1 (25%)	2 (50%)	0 (0%)	1 (25%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

## (7) 性的逸脱行動

表 3-16 年齢別度数分布

		6-9 歳	10-12 歳	13-15 歳
1 群 (N=14)	男 (N=7)	3 (52.9%)	3 (52.9%)	1 (14.3%)
	女 (N=7)	1 (14.3%)	4 (57.1%)	2 (28.6%)
2 群 (N=4)	男 (N=3)	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0%)
	女 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
3 群 (N=1)	男 (N=0)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
4 群 (N=4)	男 (N=1)	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)
	女 (N=3)	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0%)

表 3-17 入所時の同居家族

	実父 N (%)	実母 N (%)	養父 N (%)	養母 N (%)	兄・姉 N (%)	弟・妹 N (%)
1 群 (N=14)	5 (35.7%)	13 (92.9%)	4 (28.6%)	1 (7.1%)	4 (28.6%)	13 (92.9%)
2 群 (N=4)	0 (0%)	4 (100%)	1 (25%)	0 (0%)	3 (75%)	0 (0%)
3 群 (N=1)	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (100%)
4 群 (N=4)	1 (25%)	3 (75%)	1 (25%)	0 (0%)	2 (50%)	2 (50%)

表 3-18 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1 群	3.50	3.57	3.67	3.67	3.00	1.75	2.63	1.29	2.75
2 群	5.50	0.00	3.50	2.50	6.50	5.00	4.50	2.50	2.00
3 群									
4 群	3.67	3.00	6.33	2.33	1.50	4.33	3.33	2.00	6.33

表 3-19 親の一時保護同意

	親の同意 N(%)		
	同意	拒否	どちらとも いえない
1 群 (N=14)	13 (92.9%)	0 (0%)	1 (7.1%)
2 群 (N=4)	0 (0%)	1 (25%)	3 (75%)
3 群 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
4 群 (N=4)	2 (50%)	1 (25%)	1 (25%)

(8) 希死念慮

表 3-20 年齢別度数分布

		6-9 歳	10-12 歳	13-15 歳
1 群 (N=13)	男 (N=6)	2 (33.3%)	3 (50%)	1 (16.7%)
	女 (N=7)	2 (28.6%)	3 (52.9%)	2 (28.6%)
2 群 (N=3)	男 (N=3)	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0%)
	女 (N=0)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
3 群 (N=3)	男 (N=1)	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)
	女 (N=2)	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)
4 群 (N=2)	男 (N=0)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=2)	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)

表 3-21 虐待別度数分布(重複有り)

		身体 N(%)	性 N(%)	心理 N(%)	ネグレクト N(%)	DVの目撃 N(%)
1群(N=13)	男(N=6)	5(83.3%)	0(0%)	4(75%)	3(50%)	1(16.7%)
	女(N=7)	1(14.3%)	1(14.3%)	2(28.6%)	6(85.7%)	0(0%)
2群(N=3)	男(N=3)	1(33.3%)	0(0%)	2(66.7%)	3(100%)	1(33.3%)
	女(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
3群(N=3)	男(N=1)	1(100%)	0(0%)	1(100%)	1(100%)	1(100%)
	女(N=2)	0(0%)	1(50%)	0(0%)	2(100%)	1(50%)
4群(N=2)	男(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=2)	1(50%)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	2(100%)

表 3-22 入所時の同居家族(親)

	実父 N(%)	実母 N(%)	養父 N(%)	養母 N(%)
1群(N=13)	5(38.5%)	12(92.3%)	2(15.4%)	1(7.7%)
2群(N=3)	0(0%)	3(100%)	1(33.3%)	0(0%)
3群(N=3)	0(0%)	3(100%)	1(33.3%)	0(0%)
4群(N=2)	1(50%)	1(50%)	0(0%)	0(0%)

表 3-23 生活保護受給家庭度数分布

	あり N(%)	なし N(%)
1群(N=13)	7(53.8%)	6(46.2%)
2群(N=3)	2(66.7%)	1(33.3%)
3群(N=3)	3(100%)	0(0%)
4群(N=2)	1(50%)	1(50%)

表 3-24 実母の疾患別度数分布

	身体疾患	アルコール依存	精神障害	なし
1群(N=13)	4(30.8%)	2(15.4%)	1(7.7%)	6(46.2%)
2群(N=3)	0(0%)	0(0%)	2(66.7%)	1(33.3%)
3群(N=3)	0(0%)	1(33.3%)	1(33.3%)	1(33.3%)
4群(N=2)	0(0%)	1(50%)	0(0%)	1(50%)

表 3-25 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1群	4.00	3.20	4.50	3.00	3.00	2.38	2.75	1.00	3.13
2群	1.50	1.00	0.50	1.50	5.00	1.00	3.00	3.00	0.00
3群	6.00		6.00	1.50		0.00	7.00	0.00	6.00
4群	5.00	3.00	5.00	5.00	3.00	6.00	4.50	4.00	6.00

(9)反社会的逸脱行動

表 3-26 性別度数分布

	男	女
1 群 (N=14)	5	9
2 群 (N=4)	3	1
3 群 (N=3)	2	1
4 群 (N=3)	2	1
計	12	12

表 3-27 虐待別度数分布(重複有り)

		身体 N (%)	性 N (%)	心理 N (%)	ネグレクト N (%)	DV の目撃 N (%)
1 群 (N=14)	男 (N=5)	2 (40%)	0 (0%)	3 (60%)	5 (80%)	2 (40%)
	女 (N=9)	2 (22.2%)	3 (33.3%)	3 (33.3%)	7 (77.8%)	1 (11.1%)
2 群 (N=4)	男 (N=3)	3 (100%)	0 (0%)	2 (66.7%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)
	女 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)
3 群 (N=3)	男 (N=2)	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=1)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (100%)
4 群 (N=3)	男 (N=2)	2 (100%)	0 (0%)	2 (100%)	1 (50%)	0 (0%)
	女 (N=1)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (100%)

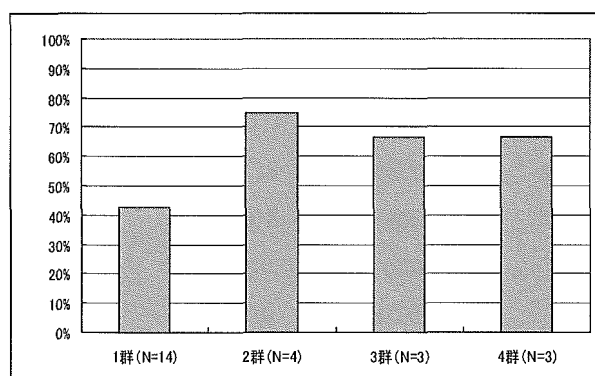


図 3-24 父親（継父、養父を含む）の同居



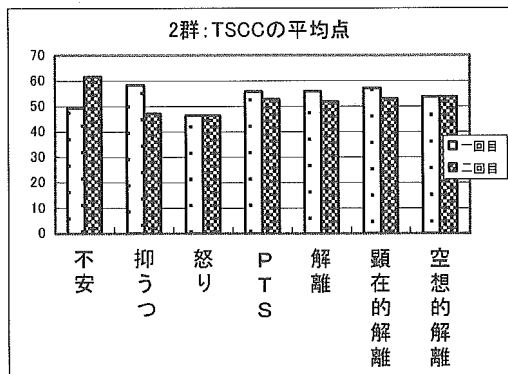


図 3-25 2 群の TSCC 下位尺度平均得点

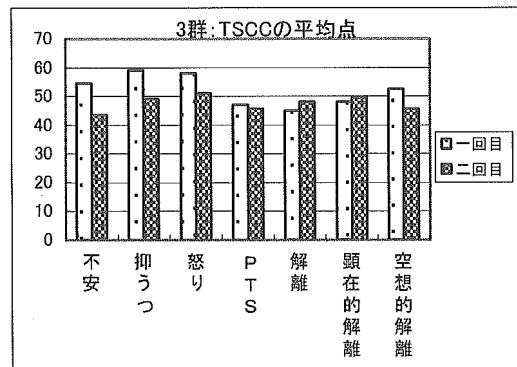


図 3-26 3 群の TSCC 下位尺度平均得点

表 3-28 PAAC 平均得点

	育児疲労	完璧育児	自信なさ	期待水準	欲求	被害感	認知	拒否嫌悪	体罰
1 群	4.43	3.00	3.50	2.90	3.71	1.71	3.50	1.44	2.29
2 群	3.50	7.00	4.50	7.00	3.00	9.00	4.50	3.00	7.50
3 群	3.00		3.00	4.00	5.00	5.00	6.00		8.00
4 群	3.50	1.50	6.33	1.67	1.50	2.00	1.33	1.50	3.33

(10) 食物固執

表 3-29 虐待別度数分布(重複有り)

		身体	性	心理	ネグレクト	DV の目撃
		N (%)	N (%)	N (%)	N (%)	N (%)
1 群 (N=12)	男 (N=4)	1 (20%)	0 (0%)	2 (50%)	4 (100%)	0 (0%)
	女 (N=8)	2 (25%)	2 (25%)	3 (37.5%)	6 (75%)	1 (12.5%)
2 群 (N=5)	男 (N=5)	5 (100%)	0 (0%)	4 (80%)	3 (60%)	3 (60%)
	女 (N=0)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
3 群 (N=5)	男 (N=2)	2 (100%)	0 (0%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=3)	0 (0%)	1 (33.3%)	0 (0%)	3 (100%)	2 (66.7%)
4 群 (N=2)	男 (N=1)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	女 (N=1)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (50%)

表 3-30 2 群における TSCC 下位尺度平均得点

	不安	抑うつ	怒り	PTS	解離	顕在的解離	空想的解離
一回目	59.5	69.3	54.5	56.3	49	50.3	47.3
二回目	48.5	42	53	46.3	46.3	47.3	45.5

## (11)感情調整障害

表 3-31 虐待別度数分布(重複有り)

		身体	性	心理	ネグレクト	DVの目撃
		N(%)	N(%)	N(%)	N(%)	N(%)
1群(N=16)	男(N=7)	5(71.4%)	0(0%)	3(42.9%)	4(57.1%)	1(14.3%)
	女(N=9)	2(22.2%)	3(33.3%)	3(33.3%)	7(35.3%)	1(11.1%)
2群(N=2)	男(N=2)	2(100%)	0(0%)	2(100%)	1(50%)	1(50%)
	女(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
3群(N=1)	男(N=0)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	女(N=1)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)	1(100%)
4群(N=5)	男(N=3)	2(66.7%)	0(0%)	2(66.7%)	2(66.7%)	1(33.3%)
	女(N=2)	1(50%)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	2(100%)

表 3-32 2群の得点の変化

	不安	抑うつ	怒り	PTS	解離	顕在的解離	空想的解離
正常域→臨床域	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
臨床域→正常域	2(100%)	2(100%)	1(50%)	2(100%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
変化なし(正常域)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(100%)

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)  
児童福祉機関における思春期児童等に対する心理的アセスメントの  
導入に関する研究  
分担研究報告書 4

## 虐待的行為につながる心理的特徴について：虐待心性尺度 (Parental Abusive Attitude Inventory: PAAI) の開発に向けた予備的研究

分担研究者 西澤哲, 屋内麻里

### 【要旨】

本研究は、虐待傾向のある親の心理的特徴を捉える「虐待心性尺度」の作成を目的とする。57項目からなる虐待心性尺度を作成し、120人の保護者を対象に調査を行なった。因子分析の結果、6因子（「体罰肯定」、「自己の欲求優先」、「自信喪失」、「被害的認知」、「疲労・疲弊」、「完璧志向性」）から成る虐待心性尺度試作モデルが作成された。このうち、「自信喪失」と「完璧志向性」の2因子以外は、虐待行動と有意な相関が見られた。中でも虐待行動に最も大きな影響を及ぼしているのは「被害的な認知」であり、この「被害的認知」は、虐待傾向の強い者の中では被虐待経験を持つ者に特有の心理的特徴であることもわかった。

### 研究協力者(五十音順)

尾崎仁美	京都ノートルダム女子大学
上條史絵	大阪大学大学院
管生聖子	大阪大学大学院
田中るみ子	大阪大学大学院
藤澤陽子	児童養護施設暁学園
松原秀子	大阪大学大学院
山本知加	大阪大学大学院

準化された調査票はいまだ開発されていない。そこで本研究では、虐待を行なう母親の心理的特徴に焦点を当てた尺度の作成を目的とする。

## B. 研究方法

### 1. 対象者および調査方法

某小学校での子どもの虐待に関する講演会に参加し、その場で説明された本研究の目的に賛同した保護者に質問紙を配布し、後日郵送により回収した。有効回答数は120だった。

回答があった120名のうち、男性は8名(6.7%)、女性は97名(80.8%)、不明15名(12.5%)であり、大半を女性が占めていた。

また年齢は、20代が2名(1.7%)、30代が66名(55.0%)、40代が44名(36.7%)、50代が8名(6.7%)であり、30代と40代を合わせると90%を占めていた。

## A. 研究目的

子ども虐待の早期発見や予防、虐待を行なう親への援助を考える場合、虐待に至る親の心理的特徴を把握することは非常に大きな意義を持つと考えられる。しかし、わが国では、環境的なリスク要因や社会的サポートに焦点を当てた研究、あるいは身体的虐待に特化したスクリーニングテストの報告(河村ら, 2005)などが散見されるものの、さまざまな虐待につながる親の心理的特徴(虐待心性)を評価できる標

## 2. 質問紙について

### (1) フェースシート

回答者の性別・年齢層、子どもの性別・年齢・出生順位を答えてもらった。なお、子どもが複数いる場合には、子育てに最も手がかかった（かかっている）子どもを一人選んで答えてもらった。

### (2) 子育ての経験（虐待的行為について）

子育ての経験として、子どもに対する虐待的行為を、身体的虐待に関する3項目、ネグレクトに関する4項目、心理的虐待に関する3項目の計10項目（付表3参照）で質問し、〈まったくなかった〉、〈あまりなかった〉、〈ときどきあった〉、〈よくあった〉の4段階で評価してもらった。この4段階に対して、1点から4点を与えて整理した。

### (3) 虐待心性尺度

今回用いた虐待心性尺度は、筆者らが本研究のために独自に作成したものであり、口唇期型育児不安に関するもの7項目、肛門期型育児不安に関するもの7項目、完璧な育児への志向性に関するもの8項目、拒否感・嫌悪感に関するもの8項目、自己の欲求優先に関するもの7項目、体罰肯定に関するもの7項目、子どもに対する認知の歪みに関するもの8項目の計52項目から構成されている（付表1参）。それぞれの項目は、〈まったく当てはまらない〉、〈どちらかといえば当てはまらない〉、〈どちらかといえば当てはまる〉、〈非常に当てはまる〉の4件法で評定され、この4段階に対して、0点から3点を与えて整理した。

### (4) 親自身の被虐待経験について

親自身の子どもの頃の被虐待経験について5項目（付表2参照）で質問し、〈まったく当てはまらない〉、〈どちらかといえば当てはまらない〉、〈どちらかといえば当てはまる〉、〈非常に当てはまる〉の4件法で評定され、この4段階に対して、0点から3点を与えて整理した。

## C. 調査結果

### 1. 子どもの基本属性

回答者に選んでもらった子どもの男女比は、男の子52名(43.3%)、女の子62名(51.7%)であった。子どもの年齢は、5歳以下10名(8.6%)、6歳～12歳84名(72.4%)、13歳～18歳12名(10.4%)、19歳以上10名(8.6%)であり、多くは小学生であった。

### 2. 虐待心性尺度について

#### (1) 項目分析

尺度の内的整合性を高めるため、GP分析を行なった。これにより、尺度合計点の上位25%と下位25%との間に有意差が見られなかった項目3, 13, 20, 28, 32, 43, 44, 48, 51, 54, 55の11項目を、尺度を構成する上で不適切な項目とみなし、削除して因子分析を行なうこととした。

#### (2) 因子分析

因子分析を行なうにあたり、上述の項目分析で不適切とみなされた11項目を除いた計41項目で因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なった。一つの因子に0.35以上の負荷がかかっていること、また他の因子に0.30以上の負荷がかかっていないことを基準に項目を選定した。その結果、6因子21項目を得た（表1）。

第1因子(4項目)は、しつけの手段として体罰を肯定する内容の項目の集まりであるため、「体罰肯定」と命名した。第2因子(5項目)は、「子どもがいるために自分の楽しみが奪われる」、「子どもがいなければもっと自由にできる」など、子どもよりも親自身の欲求を優先する項目に高い負荷が見られたことから、「自己の欲求優先」とした。第3因子(4項目)は、親としての自信のなさを示す内容の項目群であるため、「自信喪失」と命名した。

表1 虐待心性尺度因子分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
<b>因子1：体罰肯定 4項目</b>						
v6 子供をしつけるためには体罰は必要	0.930	-0.022	-0.145	0.010	0.053	-0.068
v30 体罰はしつけの方法として有効である	0.798	-0.059	0.208	-0.009	0.058	-0.129
v22 体罰を使ってでも子供をしつけるのは親の務め	0.776	-0.068	-0.174	-0.090	0.057	0.124
v14 子供が言っても聞かない時は、体罰を加えるし かない	0.690	0.066	0.141	0.062	-0.130	0.033
<b>因子2：自己の欲求優先 5項目</b>						
v29 子供がいるために、自分の楽しみが奪われた気が する	0.005	0.777	0.092	-0.228	0.313	-0.078
v21 子供がいなければ、もっと自由にできるのにと 感じる	-0.028	0.714	-0.031	-0.145	-0.037	0.274
v5 子供の事より自分の楽しみを優先したい	-0.073	0.521	-0.021	0.269	-0.061	-0.060
v52 子供さえいなければ私の人生はもっといい方向 に進んでいると思う	-0.027	0.507	-0.022	0.099	0.257	-0.089
v18 子供が自分の思い通りに動いてくれないと腹が 立つ	0.261	0.353	0.056	0.163	-0.077	0.248
<b>因子3：自信喪失 4項目</b>						
v15 子供が泣きやまないと、親として自信がなくな る	0.022	0.054	0.790	0.039	-0.096	-0.032
v41 子供が泣きやまないと、どうしていいかわから なくなる	-0.023	0.203	0.771	-0.015	-0.125	-0.069
v26 子供が思い通りに動いてくれないと、親として の自信がなくなる	-0.038	-0.224	0.570	0.198	0.199	0.225
v48 子供が思い通りにならないと、周囲から「だめ な親」だと思われてしまう気がする	-0.017	-0.159	0.530	-0.130	0.226	0.097
<b>因子4：被害的認知 3項目</b>						
v23 子供が私を馬鹿にしているように感じる	0.153	0.030	0.011	0.741	-0.022	-0.111
v47 子供が私に対して悪意を抱いているような気が する	-0.079	-0.136	0.011	0.644	0.040	-0.043
v7 子供がわざと私を困らせようとしている	-0.072	0.179	-0.015	0.505	0.062	0.145
<b>因子5 疲労・疲弊 2項目</b>						
v25 子供といると、エネルギーが溜れてしまう気が する	-0.052	0.173	0.086	0.039	0.767	-0.120
v1 子供にエネルギーを吸い取られてしまう感じが する	0.094	0.151	-0.086	0.018	0.683	0.004
<b>因子6 完璧志向性 3項目</b>						
v19 子育てを完璧にこなすのは、親の義務	0.066	-0.021	0.143	-0.271	-0.078	0.629

v11 親なのだから、子育てがうまくできて当然	-0.085	0.175	-0.038	0.085	-0.155	0.572
v10 子供が自分の思い通りに動いてくれないと不安	0.012	-0.050	-0.081	0.175	0.275	0.567
因子間相関	F1	0.234	0.171	0.377	0.199	0.130
	F2		0.228	0.352	0.342	0.087
	F3			0.356	0.503	0.469
	F4				0.346	0.289
	F5					0.345

第4因子(3項目)は、子どもの行動を被害的にとらえる傾向を示す項目の集まりであり、「被害的認知」とした。第5因子(2項目)は、親のエネルギーの不足を表す項目であるため、「疲労・疲弊」とした。第6因子(3項目)は、完璧な子育てを目指す内容の項目の集まりであるため、「完璧志向性」と命名した。なおクロンバックの $\alpha$ 係数を求めたところ、F1=0.86, F2=0.74, F3=0.81, F4=0.67, F5=0.76, F6=0.56, 尺度全体で0.85であった。F6はやや低い値となっているが、全体としてはある程度の信頼性が確認された。

虐待心性と虐待的行為との関連を見るため、虐待心性尺度総得点および各下位尺度得点と、虐待的行為の得点間の相関分析を行った(表2参照)。

その結果、「自信喪失」および「完璧志向性」では、虐待的行為との間に有意な相関は見られなかった。その他の下位尺度の多くは、ネグレクト得点と身体的虐待得点及び虐待的行為全10項目の合計得点との間に有意な差が見られた。なお心理的虐待得点と有意な相関が見られたのは、「被害的認知」のみであった。

### 3. 虐待心性と虐待的行為の関係について

表2 虐待心性尺度得点と虐待的行為得点の相関

	虐待的行為 10項目総得点	ネグレクト 得点	身体的虐待 得点	心理的虐待 得点
虐待心性尺度総得点	0.42**	0.30**	0.44**	0.12
体罰肯定	0.36**	0.19*	0.43**	0.16
自分の欲求優先	0.35**	0.28**	0.33**	0.10
自信喪失	0.11	0.14	0.13	0.11
被害的認知	0.59**	0.46**	0.44**	0.39**
疲労・疲弊	0.27**	0.18	0.25**	0.10
完璧志向性	0.09	0.11	0.07	-0.01

\*\* p<0.01 \*p<0.05

### 4. 被虐待経験との関連

親自身の被虐待経験を問う項目に対す

る得点分布を図1に示す。平均値は1.92、標準偏差は2.21であった。

被虐待経験に関する5項目合計点の中央値を基準に2群に分け、上位を被虐待経験高群、下位を被虐待経験低群とし、2群間で虐待心性尺度の得点および虐待的行為の得点に差があるかどうかを見た(表3参照)。

その結果、虐待心性尺度では、「被害的認知」および「疲労・疲弊」において2群間に1%水準で有意差が見られた。つまり、被虐待経験が多い親ほど、子育てに対して疲労感を持ちやすく、また子どもとの関係を被害的にとらえる傾向があることが示されたと言える。

また子どもへの虐待的行為に関しては、「心理的虐待」が1%水準で、また「身体的虐待」および「ネグレクト」に5%水準

で有意な差が見られた。つまり、子どもの頃に虐待を受けた経験のある親ほど子どもへの虐待的行為が生じやすく、特に心理的虐待に関してその傾向が顕著であることになる。

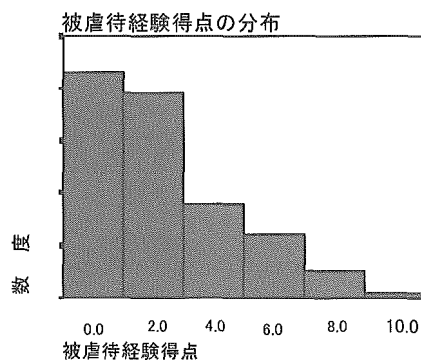


図1 被虐待経験得点の分布

表3 被虐待経験と虐待心性及び虐待行為の関連

	平均値 (標準偏差)		
	被虐待経験高群	被虐待経験低群	t 値
被害的認知	2.01 (2.00)	0.99 (1.12)	t (113) =3.49**
疲労・疲弊	1.74 (1.70)	0.96 (1.13)	t (116) =3.10**
身体的虐待	7.39 (1.42)	6.72 (1.58)	t (113) =2.16*
ネグレクト	6.50 (1.80)	5.88 (1.46)	t (112) =1.95*
心理的虐待	4.34 (1.5)	3.79 (0.96)	t (115) =2.49**

\*\* p<0.01 \*p<0.05\*\*

次に、子どもへの虐待傾向が高い保護者のうちで自身に被虐待体験がある親とない親、及び被虐待経験がありながらも子どもへの虐待傾向が低い親に虐待心性の違いが見られるかどうかを検討するため、虐待的行為に関する10項目の合計点が平均以上でかつ被虐待経験得点が平均以上の群(A群)、虐待的行為得点が平均以上で被虐待経験得点が平均以下の群(B群)、虐待的行為得点が平均以下で被虐待経験得点が平均以上の群(C群)、虐待的行為得点が平均以下で被虐待経験得

点が平均以下の群(D群)の4群に分け、それぞれの虐待心性尺度得点を比較した(表4参照)。

虐待心性尺度の合計得点はA群、B群、C群、D群の順に高くなっており、A群とD群の間に有意差が認められた。「自己の欲求優先」はB群がもっとも高くC群及びD群との間に有意な差があった。「被害的認知」に関してはA群が他の3群よりも有意に高得点を示した。「疲労・疲弊」はA群、C群、B群、D群の順に高く、A群とD群の間に有意

表4 各群の虐待心性尺度得点の平均と標準偏差および一要因分散分析

	A群 (n=22)	B群 (n=33)	C群 (n=14)	D群 (n=46)	分散分析結果	多重比較 (Tukey法)
虐待心性	21.39	18.00	15.08	14.38	F(3,102)=4.04**	A>D
尺度全体	(7.82)	(8.61)	(6.92)	(7.36)		
体罰肯定	5.43	3.88	4.00	3.71	F(3,112)=2.11	n.s.
	(2.71)	(2.68)	(3.14)	(2.58)		
自己の欲求	5.16	5.31	3.33	3.35	F(3,108)=5.75**	B>D,C
優先	(2.46)	(2.79)	(2.23)	(2.20)		
自信喪失	4.36	3.48	4.21	3.21	F(2,111)=1.21	n.s.
	(2.79)	(2.89)	(2.55)	(2.50)		
被害的認知	3.05	1.45	1.21	0.77	F(3,111)=12.84**	A>B,C,D
	(1.94)	(1.43)	(1.81)	(0.97)		
疲労・疲弊	2.23	1.30	1.36	0.84	F(3,114)=5.21**	A>D
	(1.51)	(1.31)	(1.98)	(1.12)		
完璧志向性	2.41	1.48	1.79	2.48	F(3,113)=0.73	n.s.
	(1.47)	(1.64)	(1.48)	(1.73)		

\*\*p<0.01

差が認められた。「体罰肯定」は被虐待経験のあるA群とC群が高得点であったものの有意な差は見られなかった。「完璧志向性」はD群がもっとも高く次いでA群であったが、これも有意な差は認められなかった。

この結果から、子どもへの虐待傾向を示す保護者の中でも自身に被虐待経験がある親には子どもに対する被害的な認知が特徴的に見られること、及び、被虐待体験はあまりないもの子どもへの虐待傾向が見られる保護者には自分の欲求を優先する傾向が顕著であることが示唆された。

#### D. 考察

今回の研究により、虐待傾向のある親の心理的特徴を把握するための、「体罰肯定」、「自己の欲求優先」、「自信喪失」、「被害的認知」、「疲労・疲弊」、「完璧志向性」という6因子からなる虐待心性尺度が作成された。この虐

待心性尺度は、子どもに対する実際の虐待傾向との関連からある程度の妥当性を備えていることが明らかとなり、今後の臨床的な活用の可能性が示されたと言える。一方で、本尺度の問題点として、やや信頼性が低いことが挙げられる。これに関しては、各因子の項目数が少ないことも一因であると考えられるため、今後項目数を増やすなどの改定を行い、信頼性を高める必要がある。

虐待心性尺度の全得点及び下位尺度得点のほとんどに子どもに対する実際の虐待傾向との有意な相関が認められたが、「自信喪失」と「完璧志向性」は有意な相関が見られないという結果となった。従来の研究(松本,2005,中谷,2002)では、子育てに関して自信がなく、育児不安の強い親に虐待のリスクが高いとされてきているが、本研究ではそれと一致しない結果となった。これは、子育てに対する自信のなさは育児ストレスや育児



不安を生む可能性はあるものの、それが子どもへの虐待へと直接つながるわけではないという可能性を示唆するものである。育児不安の延長線上に虐待があるとの従来の指摘が妥当なものなのかを含め、今後の実証的研究が待たれるところである。

鈴木(2001)は虐待傾向のある親について、すべての事柄に対して目標水準が高く、完璧を求める強迫観念の強い親の姿を指摘している。しかし、本研究ではこうした完璧志向性と虐待行為との関連は見出せなかった。むしろ、有意な差ではなかったものの、完璧志向性は子どもへの虐待傾向が少なく自身に被虐待体験のない親にもっとも顕著であり、次いで子どもへの虐待傾向があり自身に被虐待体験がある親に多く見られるとの結果であった。わが国においては、育児に完璧性を求める傾向は虐待傾向の有無にかかわらず多くの母親に全般的に見られるものであり、直接虐待と関連があるとは言えない可能性がある。また、完璧性を求める傾向がある保護者で実際の育児がある程度完璧に行なっていると感じられている親は虐待傾向が低く、一方で完璧に行なえていると思えていない親には虐待傾向が生じている可能性もある。今後は、完璧性の内容や完璧性に対する満足度などを含めた分析が必要となるだろう。

今回の研究からは、子どもに対する虐待行為に最も大きな影響を及ぼしているのは「被害的認知」であることが明らかとなった。また、この「被害的認知」は、虐待傾向の強い親のなかでもとりわけ自身に被虐待経験がある親に特徴的であることが示唆された。虐待環境で育った子どもは、「自分は悪い子」という低い自己評価と、「他者は自分を責め、自分を傷つける存在」という他者イメージをもつようになると言われている(西澤,1994)。そのような成育歴を持つ親は、我が子が泣き止まない、言うことを聞かないなど育児では

日常的に起こる出来事に対しても、子どもが自分を「わざと困らせようとしている」とか「バカにしている」などと被害的に認知して怒りや苦痛を覚え、虐待行動へとつながるのだと考えられている(池田,1987)。本研究においても、自身の被虐待体験と子どもへの虐待行為を媒介する要因として、子どもからの被害感を中心とした認知の歪みが重要な役割を果たしている可能性があることが示唆された。この結果は、いわゆる虐待の世代間伝達の力動の理解にとって有益であると同時に、世代間伝達を生じている保護者への援助においては被害的な認知に焦点を当てたアプローチが有効であるという可能性を示唆するものである。

また、被虐待経験は、育児に対する疲労感や疲弊状態につながることも示唆された。子どもの頃に虐待を受けて育った親は、自分の親から受け取った愛情の量が乏しく、元々の心のエネルギーとでも言うべきものが少ないために、育児に疲れやすく疲弊状態に陥りやすいのかもしれない。

さらに、今回の研究では、被虐待体験は心理的虐待へとつながる可能性があるとの示唆が得られた。心理的虐待は、親から子どもへの『心理的加虐性』を純粋な形で表現しているという点で虐待の本質であるとの指摘もあるが(亀岡,1997)、今回の研究でも、虐待心性のなかで心理的虐待と有意な関係があったのは「被害的認知」のみであることが示され、心理的虐待の特殊性が示唆されたと言える。心理的虐待を生む力動に関して、今後のさらなる研究の蓄積が必要である。

一方で、自分自身には被虐待体験がないながらも子どもを虐待する傾向がある保護者の場合には、子どもの欲求よりも自分自身の欲求を優先する傾向が顕著であることが明らかとなった。「自己の欲求優先」は「子どもがいなければ・・・」という、子どもの存在への非受容性を表す因子であり、「親」にな

りきれていないといった「親」としての未熟性や、望まない妊娠・出産のための人生設計の変更といった女性としての生き方をめぐる葛藤などが関与している可能性があると言える。今回の結果は、自分自身が虐待を受けて育ったわけではない場合でも、上述のような心理的困難や葛藤が子どもに対する非受容性を生じ、それが虐待へとつながる可能性があることを示唆している。「親」としての成熟を促進するための援助や、子どもの存在を前提としてその人なりの「自己実現」に向けた生き方の模索のための援助の提供などが必要であると言えるだろう。

本研究では、対象が虐待についての講演会に参加しさらに質問紙を返送した保護者であり、対象に大きな偏りがあった。また、その年齢も30代や40代が多く、子どもへの虐待が発生しやすいとされる年齢層を超えた保護者が研究対象となった。今後は、虐待が生じやすい乳幼児期の子どもをもつ親を対象とすることによって、虐待を生じる心理的背景をより詳細に分析すべきであろう。また、臨床群を対象とした研究が是非とも必要である。

こうした問題点はあるもの、本研究では、従来臨床的な研究で虐待傾向のある親の特徴だと指摘されてきた心理的傾向を、実証的なレベルの研究で抽出することができ、また、これらの傾向と実際の虐待的行為との関連を示すことができた。今後の虐待心性尺度の開発の礎となる予備的研究としては意義あるものであったと言えよう。また、本研究では、被虐待経験の有無や程度の違いによって子どもに対する虐待に至る心理的特徴に違いがある可能性が示唆された。今回は、「被虐待経験」に関してはその虐待の種別の違いを分析できなかったが、今後は、身体的虐待や心理的虐待など保護者が経験した虐待の種別によってその心理的な影響が異なるのかどうかなど、より詳細な検討を行なう必要

がある。

## F. 結論

1. 小学生を中心とした子どもを持つ一般の保護者120名を対象に、本研究のために作成した57項目から成る自記式質問紙である『虐待心性尺度』に回答を得た。
2. 因子分析法の結果、「体罰容認」、「自分の欲求優先」、「自信喪失」、「被害的認知」、「疲労・疲弊」、「完璧性」から成る「虐待心性尺度」試作モデルが作成された。
3. このうちで、「自信喪失」と「完璧性」以外の因子で、虐待行動との間に有意な相関が見られた。中でも虐待行動に最も大きな影響を及ぼしているのは「被害的認知」であることが明らかとなった。
4. また、虐待傾向が高い親の中でも、被虐待経験のある親と虐待経験のない親では異なった心理的特性を持つことが示唆された。

## 《参考文献》

- 池田由子 (1987) : 児童虐待 : ゆがんだ親子関係. 中公新書.
- 井上登生 (2005) : 虐待をしている養育者への対応. 小児科診療, 2, 117-123.
- 亀岡智美 (1997) : 被虐待児の精神医学. 臨床精神医学, 26(11), 11-17.
- 河村代志也, 加藤正子, 秋山剛, 他 (2005) : 乳児の母親にみられる子ども虐待の可能性. 日本社会精神医学会雑誌, 13, 116-128.
- 松本疇通 (2005) : 虐待の予防 : 育児不安への対応. 小児科診療, 2, 101-108.
- 中谷奈津子 (2002) : 虐待の世代間連鎖と母親の育児不安に関する研究. 家族関係学, 21, 153-163.
- 西澤哲 (1994) : 子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ, 誠信書房.
- 鈴木敦子 (2001) : 児童虐待における家族ケア—強迫観念の強い親と未熟な親への初

期ケアに焦点を当てて一. 小児看護, 24,  
1782-1785.

《謝辞》

本調査の趣旨をご理解いただき、調査にご協力いただいた方々に深く御礼申し上げます。

付表1 虐待心性尺度 (52項目)

育児不安 (口唇期型)	① 子どもにエネルギーを吸い取られてしまう感じがする。 ② 子育てに疲れ果てている気がする。 ③ 子どもは、いくらしてあげてもきりがないと感じる。 ④ 子どもといると、エネルギーが涸れてしまう気がする。 ⑤ 自分自身のエネルギーの補給ができない。 ⑥ 子どもが泣き止まないとどうしていいかわからなくなる。 ⑦ 子どもは泣くのが仕事だと思う。*(逆転項目)
育児不安 (肛門期型)	① 子どもを自分の思い通りに動かそうとしてしまう。 ② 子どもが自分の思い通りに動いてくれないと、不安になる。 ③ 子どもが自分の思い通りに動いてくれないと、非常に腹が立つ。 ④ 子どもが自分の思い通りに動いてくれないと、親としての自信がなくなる。 ⑤ 子どもが自分の思い通りに動いてくれないと、子どもから馬鹿にされているような気になる。 ⑥ 子どもとは、本来、親の思い通りにならないものだと思う。*(逆転項目) ⑦ 子どもが思い通りにならないと、周りから「だめな親」だと思われてしまう気がする。
完璧な育児への志向性	① 子どもが生まれるなら、誰でも自然に「母性」を持つようになると思う。 ② 親なのだから、子育てがうまくできて当然であると思う。 ③ 子育てを完璧にこなすのは、親の義務であると思う。 ④ 子育てを家族以外の人に手伝ってもらうことは、親としては適切でないと感じる。 ⑤ 親族といえども、子育てには口出しして欲しくないと思う。 ⑥ 子育てが満足にできてこそ、一人前の「女性」であると言える。 ⑦ 子育ての方法を人に教えてもらうのは、親として恥ずかしいことだと感じる。 ⑧ 子どもの名前は親が決めるものだから、親族が口を挟むべきではないと思う。
拒否感・嫌悪感	① 子どもがかawaiiと思えない。 ② 子どもが汚らしいと感じる。 ③ 子どもが気持ち悪いと感じる。 ④ 子どものウンチには平気で触れる。*(逆転項目) ⑤ 子どもを抱くことに抵抗感がある。 ⑥ 子どもを抱いていると、穏やかな気分になる。*(逆転項目) ⑦ 子どもを抱いていると、楽しい気分になる。*(逆転項目) できれば、子どもを抱かずに過ごしたい。
自己の欲求優先	① 子どものことよりも自分の楽しみを優先したいと思う。 ② 子どもが寝ているのであれば、子どもだけを家を残して遊びに出ても大丈夫だと思う。 ③ 子どもがいなければ、もっと自由にできるのにと感じる。 ④ 子どもがいるために、自分の楽しみが奪われた気がする。